

日本古典籍セミナーホノルル2018

2018年3月1日 ホノルル美術館レクチャーホール

---

# 写本について

— 写記(奥書)と識語 —

Lecture on Manuscripts

— Shaki (Okugaki) and Shikigo —

国文学研究資料館 落合博志

# 写本の書写に関する情報＝写記

---

- 版本に記載された出版に関する情報(年月日・版元名など)を「刊記」と呼ぶのに対し、写本に記載された書写に関する情報(年月日・書写者名など)を「写記」と呼ぶ。(近年、発表者が提唱したもの)

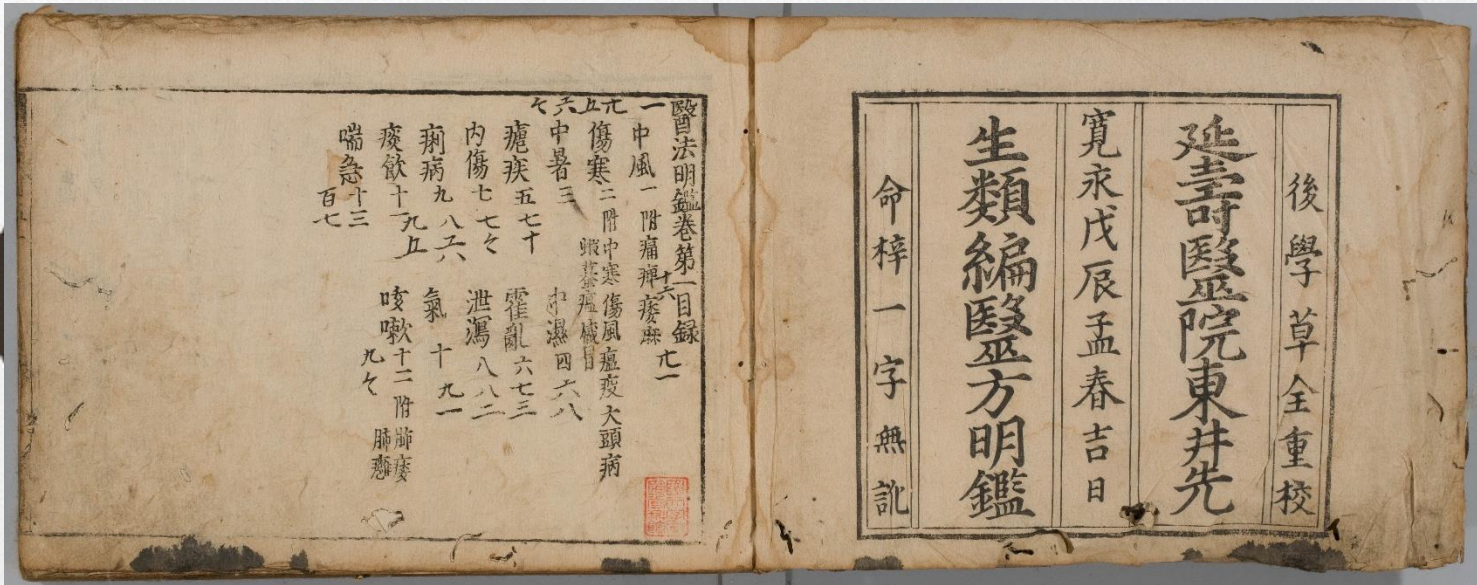


# 刊記と写記

---

- 版本の刊記は、本の末尾部分にあることが多いが、前見返しなどにあることもある。しかし、出版に関する情報は場所にかかわらず「刊記」と呼ばれる。
- 写本の書写に関する情報も、本や巻の末尾以外に書かれることがあるため、総じて「写記」と呼ぶのが整合的である。すなわち、「奥書」の上位概念として「写記」を設定し、版本の「刊記」に対する概念とする。

医法明鑑(国文学研究資料館蔵) 前見返しの刊記  
寛永戊辰(五年、1628)刊



<https://doi.org/10.20730/200013296>

一般 ヤ9-458-1~2



飛鳥山十二景詩歌并碑(国文学研究資料館蔵)

前見返しの刊記

安政戊午(五年、1858)刊

安政戊午鑄

飛鳥山十二景

清音閣蔵梓

飛鳥山十二景詩并序

飛鳥山在武州豐島郡滝野川其為  
境也豁爾茫乎氣象萬狀不可勝  
數也其東則遠之房總近之平冢其  
南則遠之東叡近之深井西原其西  
則遠之富士秩父近之板橋練間其  
北則遠之二荻筑波近之王子及臺



# 奥書

---

- しかし、版本の刊記がしばしば前見返しなどに(も)あるのと異なり、写本の書写に関する情報は、ほとんど本の末尾や各巻の末尾に書かれる(=奥書)。そのため、ここでは主として奥書について問題にする。

---

# 本奥書と書写奥書



# 本奥書

---

- 写本の奥書のうち、その写本の底本(親本)に書かれていた奥書を「本奥書(ほんおくがき)」と言う。
- 日本の古典籍写本では底本(親本)のことを「本」と言うので、「本奥書」は“底本にあった奥書”の意味である。



新百人一首(国文学研究資料館蔵)

享祿二年(1529)・永祿九年(1566)奥書

Handwritten text in cursive style, likely a copy of a poem or letter, written vertically from right to left. The text is dense and difficult to decipher due to the cursive script.

文明十五年祥雲月下四日  
乃りしころ菅と傳平

沙門判

本云  
傳平

是者常徳院殿御作探云故者常徳院  
唯兵道具持也云云以天中并並秀本  
享祿二年九月十三日書字之終切早  
永祿九年十二月二日書云云





古今和歌集(国文学研究資料館蔵貴重書)

嘉禄二年(1226)藤原定家奥書

深養父のりよるふたひに下  
道はみよゆい位会の洋より  
かたき

此集家六稱雖説多自任師説  
みかへ見鳥備後學之流本手自  
書之上代僻事少中書生之失錯  
稱有識之秘事謂道之魔性不可用  
但此用捨不可隨于身之所好不  
可存自他之差別志同者可用之

嘉禄二年閏九月日戸部尚書判  
于時類齡六十五字理右筆



古今和歌集(国文学研究資料館蔵初雁文庫本)

嘉禄二年(1226)藤原定家奥書

卷十三

ねりてぬよの葉のち秋とて  
衣通始のいりりわてし門とて

我にこころ未癒きこがかりき  
深き又あつといたかりき

賀之

此集巻之末梅隠説多且何所説又以前為備後

學之流不字自書之近代傳書之  
錯梅有歳之秘事一下留道之  
但此用花只のは書力不  
志同者一月之

赤禄二年四月九日

戸部尚言判

于特類餘六十五章は右筆



# 書写奥書

---

- 本奥書に対し、その写本の書写について記した奥書を「書写奥書(しょしゃおくがき)」と言う。
- 書写奥書はその写本に固有のものであるが、本奥書は同じものが複数の写本に共通して見られることがある。



溪嵐拾葉集(国文学研究資料館蔵)

嘉吉元年(1441)・貞享二年(1686)奥書

廿七日

佛池三藏

道緯禪師

文徳天王

廿八日

智成大師

尋禪僧正

證真法印

求道上人

敦光

廿九日

惟首座主

湯成天王

法明大師

智證大師

醍醐天王

隆義經

廿日

清凉大師

俊成師

不文拾葉集

嘉吉元年 辛酉六月十六 書寫了

招蓮

右者依法曼院前大僧正慶兼命以東叡山天海蔵  
佛本書寫考真隆佛法被入法曼蔵畢

一後

筆者

宗益

貞享三 寅年十月廿一日



溪嵐拾葉集(国文学研究資料館蔵)  
 冊初の印記「法曼院」「慶算」

溪嵐拾葉集

日寐記 私百



一日 龍智三藏

道遠和尚

鎌徳公

遣賀座主

公任孫

覺運僧正

杜須

仲平大臣

室威孫

大智律師

覺尋座主

忠義公

勝覚僧正

原頼信

孝平親王

慈成和尚

二日

行基菩薩 聖武天皇

善清行

相應和尚

貞観公

實定公

觀律師

鳥羽院

三日



# 本奥書・書写奥書の問題(1)

---

- 全ての奥書は、本奥書または書写奥書のいずれかである。
- 複数の奥書がある場合、最後の奥書より前のものは本奥書である。
- 奥書の前に「本云」とあったり、書写者名の後に「判」(花押が書かれていたことを示す注記)とあるものは本奥書である。

## 本奥書・書写奥書の問題(2)

---

- しかし、最後の奥書が書写奥書(=その本の書写についての奥書)とは限らない。
- つまり、本奥書は写しても、自分が書写したことを示す奥書は書かないこともある。
- 奥書が一つの場合も同様で、その奥書が書写奥書とは限らない。



どうやって本奥書か書写奥書かを認定するか？



十願發心記(国文学研究資料館蔵)

延徳二年(1491)・明応四年(1495)・明応六年(1497)奥書

此所發心言比今都下定章房 頼珠 下持之乎 先發自筆  
謹以祈覺之義深居之志有悟界之邊之志實法  
永深修之微行時錫印儀威儀仍之別心所奉書寫  
之嗚呼途雖非三五苦海之沈溺遠矣修十願於  
一自修於名奉於名是林葉加照照也昔部率之結構  
常引之氣修之  
此道修三年辭極月三日叩硯冰滌毫筆拭情眼  
模明文字也

總那由親結心勒息憂無 滿六

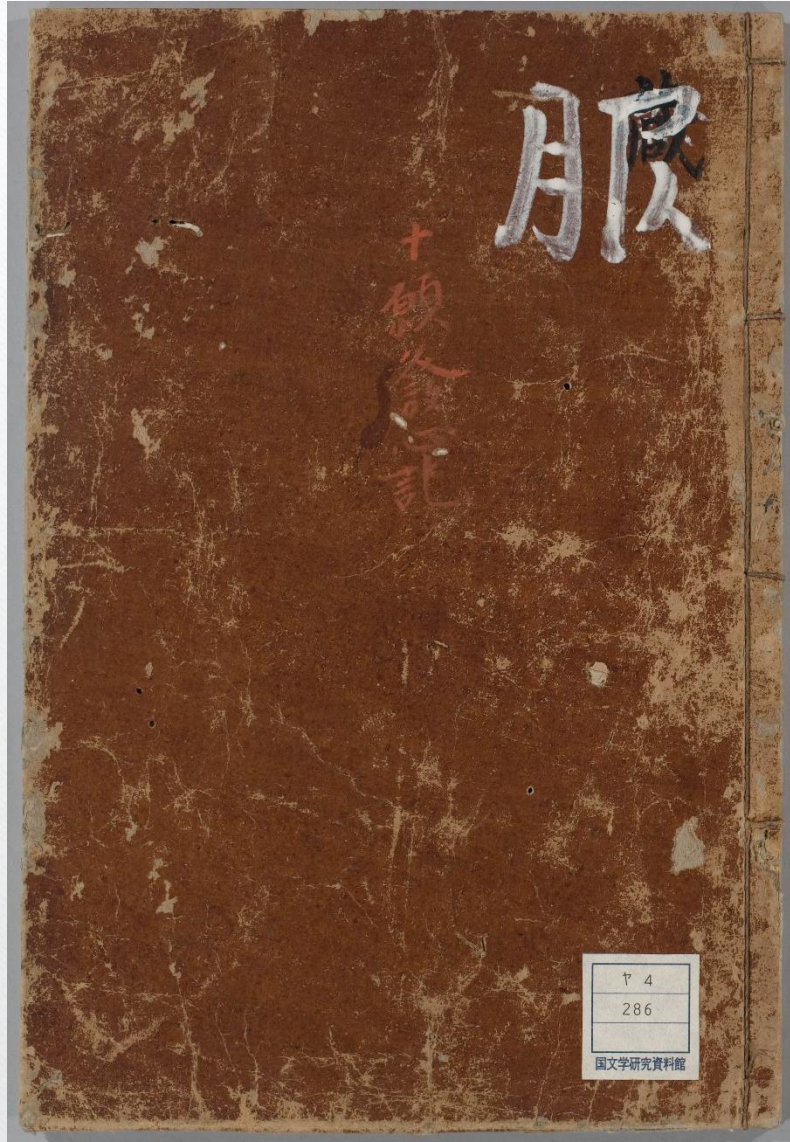
佛子無之同然若福足可圖其益彼仍作惡和加朱墨  
點記 愚昧之普見定之寸志取忘欲有也之停磨  
類治賢可被加佛制之也 喜惡在法之十願須知之  
以意四年初喜之此以石所奉此集略合判書寫之乎  
法王嘉政

同六年二月廿四日石所奉書

嘉合

奉讀乎





十願発心記(国文学研究資料館蔵)  
表紙(栗皮色表紙) ↓江戸時代初期～前期を中心に  
使用

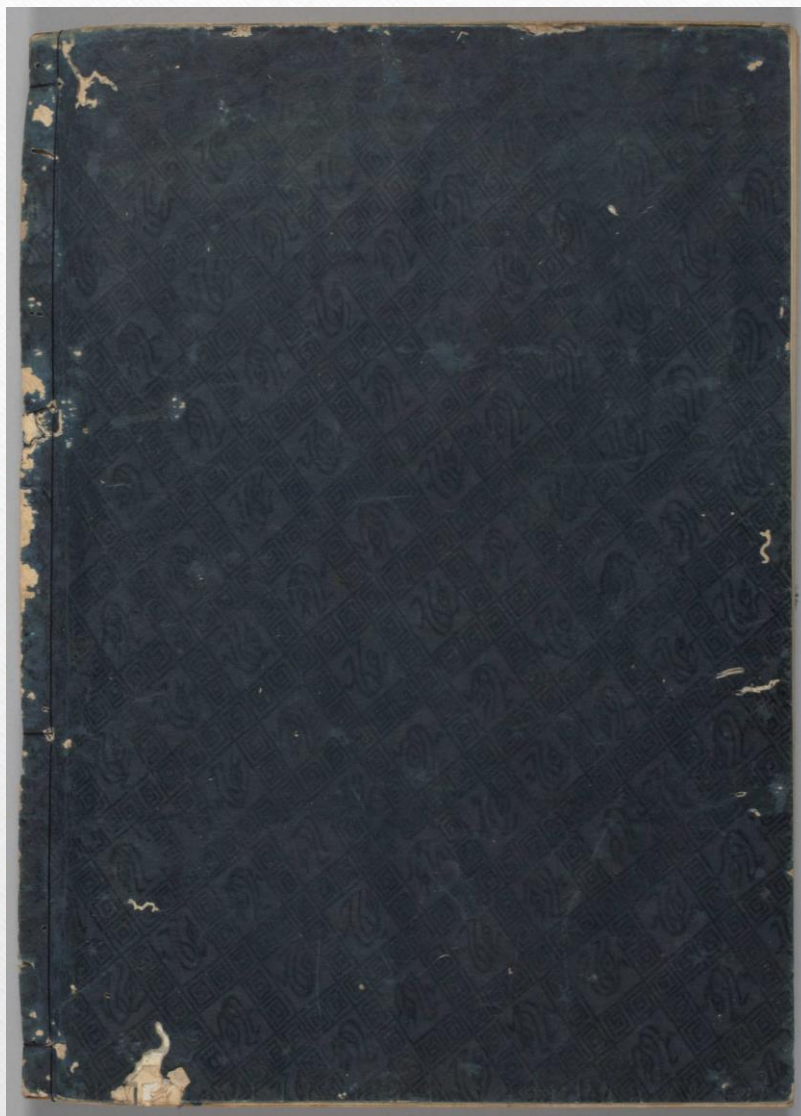
<https://doi.org/10.20730/200014695> 一般 ヤ4-286



後拾遺和歌集(国文学研究資料館蔵)  
元弘二年(1332)奥書

大に匡衡の如く  
ふんじりてはかりぬくべきの要ありとせん  
也  
赤澤忠の  
まわすおれをきとらんはこころをわらわす  
わらわす

元弘二年<sup>壬申</sup>三月廿三日令書  
同廿八日令談令書入る字未況  
席貴中郎将藤原なる也



後拾遺和歌集(国文学研究資料館蔵)  
表紙(雷文襷雨龍文表紙) ↓寛永年間(1624)  
1643)前後に使用



# 本奥書と書写奥書の認定

---

- 「この点を調べれば本奥書か書写奥書かが分かる」といった万能の方法はない。
- 多くの場合は、紙質・墨色・書風・表紙などから、経験知に基づいて判断することになる。
- 奥書のない写本の書写年代の認定も同様である。

---

# 奥書と識語



# 写本の識語

---

- 写本において、書写以後に書き入れられたその本や著作などに関する記事を「識語」と言う。
- 他の本と比較して異同を書き入れたことを示す識語、その本を手に入れたことを示す識語、その本を伝授したことを示す識語、その本の筆者を鑑定した識語などがある。
- 識語は、本の末尾や初めの余白に書かれることが多い。



新古今和歌集(国文学研究資料館蔵)

文明十二年(1480)校合識語(下冊末、右頁)

以集奉相對禪圖

令校合之既

文明十二年仲春下旬

元大將書

右平少中六次校合

信音云云在箱中

以之於十二日

而物之

定形亦九

特選有也



後鳥羽院宸記(国文学研究資料館蔵)  
安永十年(1781)入手識語(冊末)

斯建保御記一冊不慮所  
覓得殊秘者也

安永十年秋

権大納言藤原

84515  
381108

美術書肆  
柏林社書店  
東京都文京区本郷6-25  
電話 011-5445



新古今和歌集(国文学研究資料館蔵)

寛永十一年(1634)加証識語(冊初)

這一冊者松木政宗總御所筆也

寛永十二年

拾月下旬

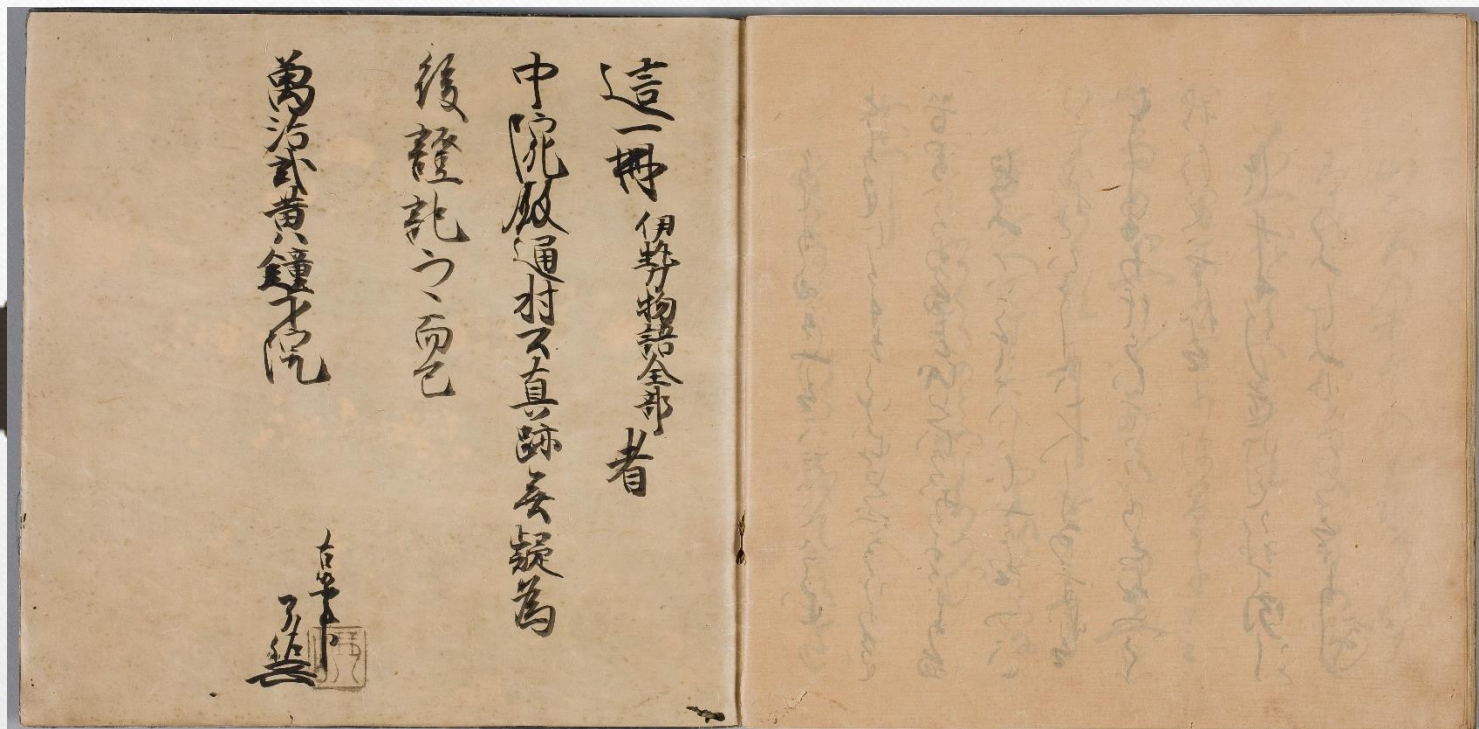
古筆  
子休

新古今和歌集序

夫和歌者群德之祖百福之宗也玄象天成五際六情之  
義未著素鷺地靜三十一字之詠甫興介來源流寔繁長  
短雖異或仰下情而達聞或宣上德而致化或屬遊宴而  
書懷或採艷色而寄言誠是理世撫民之鴻嶽賞心樂事  
之龜鑑者也是以聖代明時集而錄之各窮精微何以漏  
慨然猶崑嶺之玉採之有餘鄧林之材伐之無盡物既如  
此歌亦亘然仍詔奏議右衛門督源朝臣通具大藏御藤  
原朝臣有家左近衛權中將藤原朝臣定家前上總介藤  
原家隆左近權少將藤原朝臣雅經等不降貴賤高下令



伊勢物語(国文学研究資料館蔵)  
万治二年(1659)加証識語(冊末)



這一冊 伊勢物語 全卷 者

中院殿通村不真跡去疑為  
後證訛之而已

萬治貳年黃鍾才院

古  
不  
院

# 奥書と識語の区別

---

- 識語が写本の末尾にある場合、奥書との区別が問題となる。
- その写本の書写の時点で、書写の年月日・書写者などについて記したものは奥書(書写奥書)である。
- 書写の時点より以降に書かれた、その写本の書写と無関係な記事は識語である。



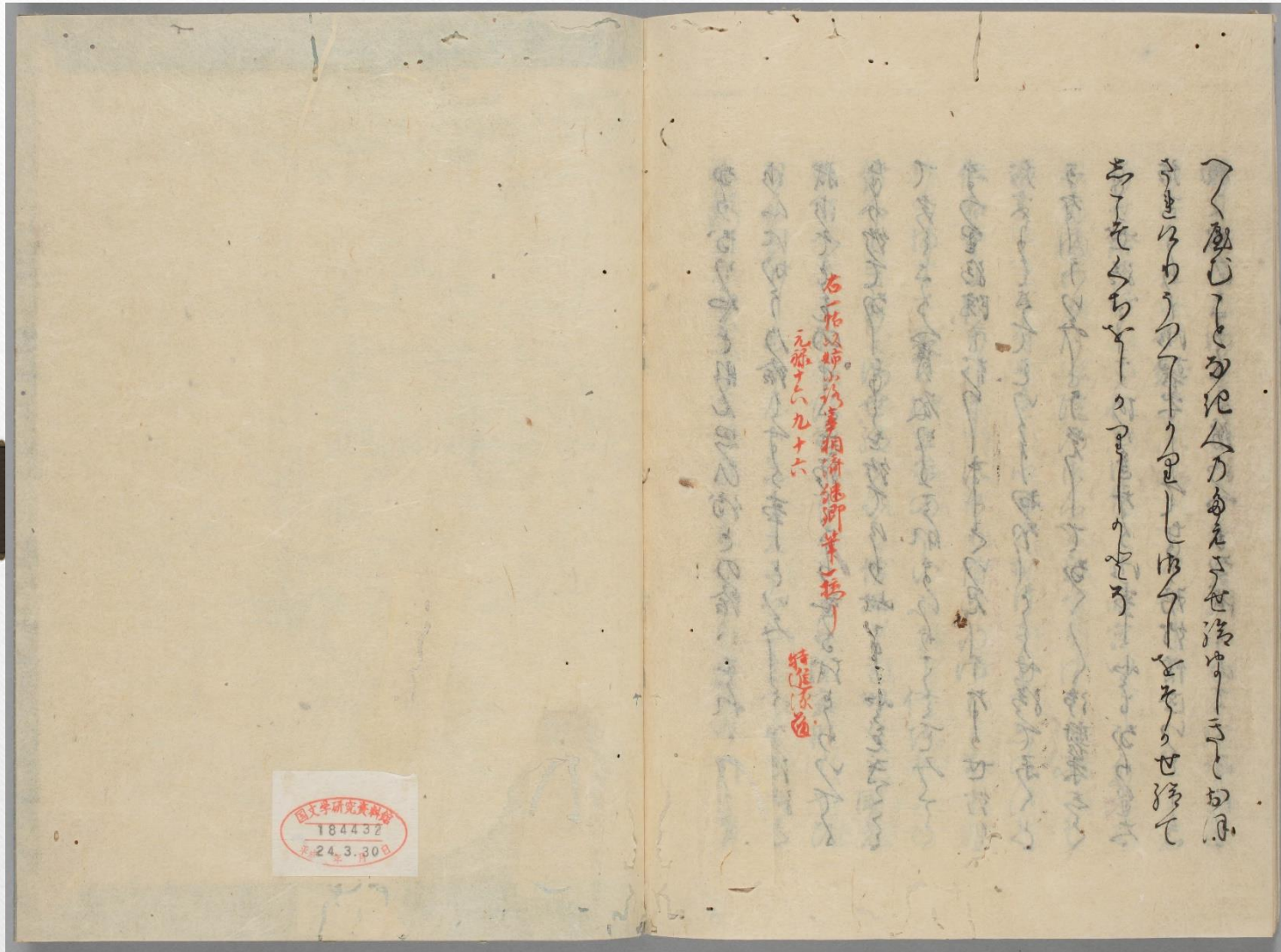
# 識語の用法

---

- 版本においては、その本や著作などについて書き入れた記事は、書かれた場所によらず全て「識語」と呼ぶ。
- 写本においても同様に用いるのが合理的・整合的である。

栄花物語(国文学研究資料館蔵)

元禄十六年(1703)久世通夏校合識語(冊末)





人倫重宝記(国文学研究資料館蔵)  
 文化十年(1813)入手・表装識語(冊初)

文化九年某月某日書林  
 萬笈坐英平吉主より方銀  
 二片より一冊を以て得たりと  
 何れ十年ある霜月下浣  
 表装舎を以て宗義より

式亭



人倫重寶記卷之一

目錄

- 一 天子の御出所
- 二 公家の御出所
- 三 將軍の御出所
- 四 大名の御出所
- 五 農人の御出所
- 六 細工人の御出所
- 七 商人の御出所
- 八 兵士の御出所

